

屋がとう／＼病氣に觸つたらしい、病臥中はたゞ芝居の囁語ばかり云つてゐた。

最後の前日の夕暮、二十四孝の八重垣姫を、仰臥したなりで、手ぶり足どりで、細い嘎れ／＼の聲でかけ聲をして、遣つてゐるやうな容子をしたりした、看護の人達は皆聲を吞んで泣かぬものはなかつたといふ。果してその翌曉四時、眠るが如く此世を去つた。

血の出るやうな難行苦行

淨瑠璃道修驗者の體驗

時代は進んだ、科學は發達した、機械力が萬能になつた、電氣が物を言つた、人間が伶俐になつた、一足飛びに出世をした、テンポの時代、レビュウの時代、かうした目まぐるしい常態である現代から、ふりかへつて淨瑠璃道の修行といふものを觀てみる。むろん、古臭くも見へやう、馬鹿正直でもあらう、ノロマでも致し方が無い。彼れ等は骨を削り肉を殺ぐより外の方法は、修行ではないと思つてゐたのである。難行苦行といふ文字は、あながち修驗道の行者ばかりが經驗した熟字でもない、淨瑠璃修驗者には半分は分け與へて然るべしである。

以下尠しくその實例について云つてみる。

その實例を述べる前にちよつと斷つて置きたいが、これはむろん、現在の淨瑠璃界のことではない、淨瑠璃といふものを自分の命とし、淨瑠璃といふ神様に身命を捧げてゐた時代、即ち明治二十年頃までの淨瑠璃國の國民の間に行はれたことであつて、現代のやうな文化の發達した時代の淨瑠璃境界の人々からは、まるで夢の世界を觀るやうに不思議なことばかりで満たされてゐる筈である。本題に入る。

その頃淨瑠璃國の法律は、序の切を語れるやうになるまでは、羽織が着られない、冬でも蒲團（樂屋）が敷けない、皮草履が履けな

い、(藁草履)辨當は握り飯と梅干の外は喰へない、夜明けから詰めて櫓下の大夫が歸るまで外出がならない。まるで無いもの盡しだ。

◇
勿論誰れもそれを不思議だとも思つてゐない、その上に、師匠の稽古場や家庭に在る間の奉仕、着付けの手傳ひ、風呂の流し、髪結の代理、便所のお供、入るさ出るさの下駄直し、それでも心の配り方が足らぬと云つては拳固、師匠の座蒲團や、見臺、三味線、撥、などを持たして貰へるやうになれば大分鼻が高い。

◇
素湯を汲まして貰ふやうになれば鬼の首、腹巻でも手傳ふやうになれば赤飯でも配つて祝ひをする程である。さうした暇をぬすんでは師匠や先輩の語り口を聞いて、稽古本に朱を入れる、萬一の場合替り役でも振つてくれないかと思ひながら、一生懸命手すりの蔭や翠簾のうちで獨り心を碎いてゐる。そんな風で大序を五枚ほど三日目乃至五日目ごとに語らして貰つて、芝居から貰ふ給金が十五日間金三十錢。

◇
通稱堀江の大師、連五代目彌太夫が死んだ時、彼れが所有の皮文庫の中から、汚れの爲めにカチ／＼になつた手拭やうの古裂が大切に仕舞はれてあるのを發見した。家人は勿論誰れ一人これが何ういふ素性を持つてゐるものか知る筈はなかつた。また調べて見る必要もないほどの古木綿の裂である。ところが後年彼の日記の記事によつて、この古裂の素性が判明した。それはいつたい何の用を爲すものかといふと、彌太夫が師匠と奉じた名人長門太夫の痰拭ひであつたのである。道理で鼻や痰の爲めにカチ／＼に固まつてゐる。長門が或時語り場で意氣込みの都合から、この痰拭きをボンと下へ投げた下には弟子の彌太夫が湯を汲みながら本へ朱を入れてゐた、彼れはその痰拭をそつと懷中へ入れて持つて歸つてしまつた、さうして師匠ほどの藝人になりますやうにと毎日その痰拭に祈つてゐた。

◇
その彌太夫は有名な悪聲小音、それだけ修行に一層困苦を嘗めた、父親は道具屋、髮結、湯屋の株を持つた人だが、淨瑠璃好きで、十歳にも足らぬ彌太夫に藝を仕込まうとした。而かもそれが馬鹿に嚴格で、十一歳の時に長門太夫の門に入れたが、覺へが悪いと云つては風呂へ連れて行つて、彌太夫を逆さに抱いて、湯槽の中へ頭を突き込む。驚くまいことか浴客は見てゐられないので仲裁する。こ



像の夫太彌本竹代五

れはいつものことだつた。彌太夫はこの時の心持を日記に書きつけてゐる（彼は十一歳より七十歳の歿年まで日記を書いた。風呂の日記は十五歳の時）そしてその末尾にこんな歌のやうなものが書いてある。

しんの闇、見えも恥をもいとわずして、けいこ場二かいに、ひとり泣くらむ



五代目豊澤廣助は氣むづかし屋の上に呑み手で、毎晩のやうに夜更けまで、弟子を前に置いて、チビリ／＼と遣りながら、罵倒や小言をならべ立てる。廣助にすると、これが何よりの肴で、弟子にすると、まるで石子詰めの刑罰に遭つてゐるやうなものである。たいていの辛抱は出来るが、この修行には誰れもまゐつてしまふ、だからそのまゝ飛び出して逃げてしまひさうなものだが、不思議に誰れ一人師匠の横つ面を擲つて逃げ出したやうな人間の出たことを聞かない。それは何故かといふと酒を呑まない場合の廣助の熱心な稽古ぶりと、酷しい中に温かい師弟の情味を多量に有つてゐたからである。



攝津大掾の修業時代、中將姫の雪責のところが目く行かないので、彼れは夜更け人靜まつて後ち、ひそかに例の責め場の泣き聲をやつてゐたが思ふやうに行かない、いつそ自分を苦しめて見やうと考へて、疊に顔をすりつけて痛さを身にしめて泣いたりなどしてゐた。長屋の人達は、病人でも出来たか、或ひは怖ろしい殺人でも行はれてゐるのではないかと非常に驚いて、より／＼人を集めてゐる容子が、ふと當人の耳へ入つた。そのうち長屋の人達は大掾の家を起しに來た。いまさら自分の稽古だつたと白狀も出来ない始末で、ぬけ／＼とした顔をして大掾も長屋の人達と一緒に隣り近所へ、うめき聲の主を尋ねまはつて歩いた。



像の夫太路越様大津誦本竹

『のろま』といふのが三代目竹本大隅太夫の幼時の異名であつた。だから修業時代の際でも、無論此のろまは除かれてはゐない、團平について木下陰狭合戦の『壬生村』を稽古してゐる或る夏のことだつた、——守り袋は遺品ぞと——といふところが、どうして

も語れない、團平は何百回といふほど、此處を繰りかへさせた、大隅はもう泣顔をしてゐた。團平は、のろまだなとしみ／＼思ふたがそれでも、いつまでも稽古をつけてやつた。とう／＼團平は蚊帳の中へ入つて横に成りながら大隅の語るところを聞いてゐた。大隅は蚊に喰はれながら相變らず、——守り袋——をやつてゐる。短い夏の夜はもう明け方に近かつた。うと／＼眠つてゐたと思はれた



竹本大隅太夫の像

團平は始めて『出來た』と云つた。團平は一睡もして居なかつた、その爲めに彼はとう／＼半年ばかり醫者通ひをした、目を疾つたのだ。この事を話していつも大隅は泣いた。大隅の執拗な猛練習もあらいが團平の熱情は更にゑらい。

かうして壬生村が出世藝になつた大隅には、まだ生命がけの『合邦』がある。春子と名乗つてゐる時代だ、姫路の旅興行で例の合邦の詞の——オイヤイ／＼——がどうも情が乗らないので三味線の團平師匠は、いつまで経つても次を弾いてくれない。たゞさへ繰り返しの此くだりに大隅は弾かれるまゝに無中になつて語つてゐた。怒鳴りつゞけた大隅は、いつか頭がボーとなつて、見臺へ顔を伏せて放心状態になつてしまつた。原因を知つてゐる團平は騒がずに大隅の状態に注意をしてゐた。見物や樂屋の人達がハツと氣附いて立ち騒ぐ物音にふと我に還つた大隅はどうやらあとをつゞけることが出來た。おそろしい苦行もあつたものだ。

三代目越路太夫が稽古をつけて貰つた豊澤團七は評判のむつかし屋である。越路がまだ子供の時代だが、覺へが悪い、といふので、團七は細帯で越路を縛つて、雪の降る庭へ突き出して立樹に縛りつけて置いた。雪はドン／＼降りしきる、日は暮れて夜は更ける、それでも、しく／＼泣いてゐる越路に向つて師匠は『よく考へて見よ』と云つて許さうとはしなかつた。あまりに歸宅の遅い我子を案じて越路の父は師匠の許へ尋ねよつた。來て見れば此始末だ。——なんぼなんでも、あんまりだ——と父は師匠に喰つてかゝつた。師匠はかう云つた——一人前の藝人にしやうといふのなら、これくらいの折檻は我慢をしなさい——と。

この師匠の三味線で、泉州佐野の旅興行に出掛けて忠臣藏の九段目を語つた時、越路はもう／＼しみ／＼師匠の厳格さを知つてゐる



竹本越路太夫の像

ので、なんとしても師匠の満足を買はねばならないと、思ひあまつて、三里ほどの道程のある犬鳴山の不動山へ深夜の跣足まわりをやつた。さうして———どうぞ此大役を果し得まするやう———と水垢離をとつて唯一心に祈りに祈つた。

越路は生涯この團七師匠を藝の親として感謝してゐたが、その團七師匠に貰つた遺品の傷痕が、前頭部に撥で擲られた處一箇所、後頭部に銅の十能で打たれて禿になつた處一箇所、二階から蹴落されたぐらゐは毎度のこと皆、猛練習のたまものだといふ。

難聲の五代目彌太夫は、泣きと、笑ひの、稽古にどれほど苦勞をしたか知れない。毎朝河堀口の長門師匠の許へ通ふ時、第一にそれが氣にかゝつた、難聲の者は一度泣くところを二度も三度も泣かねばいけないと教へられてから、いつも道々泣きの稽古をしながら我を忘れて歩いて行く、高津邊の大家の家では、———それ泣き男が通つたか、よ朝飯にしやう———と時大鼓の代りに使はれてゐた。

この彌太夫が後年堀江の大師匠時代には、決して擲つたり怒つたりする亂暴な稽古はしなかつたが、弟子に對しては玄人素人の別なく、其指導ぶりは嚴格を極めたものだつた、文樂座でも、その頃聞へた錚々たる太夫がある時、千本の椎の木を習つてゐる時、彌太夫が例の權太の臺詞———エ、その目で睨むかい———と撥を前へ突き出すと、言葉の氣合に氣を呑まれたか、前に座つてゐた某太夫はピツクリ二三尺後ろへバネ仕掛の人形のやうに飛び散つた。

稽古中の人形遣ひは、人形を天井からぶら下げて、胴と足を遣ふ稽古をする。故人多爲藏が師匠の吉田金四の許で、これを遣つてゐると、師匠の友達の二代目吉田辰造がよくやつて来て、師匠と一緒にやつて、さんぐに拙い多爲藏を罵倒する。多爲藏にはつくづくそれが情けなかつた、然かし倦まず撫まずそんなことを三年ばかり遣つてゐるうちに、とう／＼芝居から金一朱の給料が貰へるやうになつた。彼は無上によるこんだ、一朱は六錢あまりの金である。

誠意で、熱心で真剣で生命を打ち込んでの唯だ一直線の難行苦行、そこから頭の下がる藝術が生れる。

活歴流行の餘響

附改作ばやり

明治維新といふ乾坤一擲の大變動は、思想的にも異常な革命があつて、西洋崇拜とこれに反動する歴史的懐古趣味とが、不均衡な矛盾を起して外的に現はれて來た。かうした變調は一般社會の上ばかりでなく、演劇界にも當然その現はれを見せ、わが固有藝術の文樂座の人形淨瑠璃にも不可思議な姿をあらはしたのである。淨瑠璃史の上の小波動として、記述する必要があると思ふ。

時世に觸れることに敏感であつた當時の文樂座の經營主植村文樂翁（大助）が、盛んな活躍をつゞけてゐた時のことだから、無論かういふ姿を見せたのは當然のことではあるが、明治五年十一月十五日初日の松嶋文樂座の『出世太平記』に早くもその發芽を見せてゐる。これは三日太平記の改題で、武智を明智、眞柴を羽柴と改めてゐる。こんな程度でまだ内容に觸れてはゐないのだから、活歴とは云へ、それはほんの鋒鋦のあらはれに過ぎない。だが年と共に次第に濃厚になつてくる。翌六年一月には文樂の舊地博勞町稻荷社内の芝居で（博勞町の文樂座は五年冬に焼け直ちに新築、その舞臺開きと續いて一興行だけ此處に移つて興行した）活歴式の忠臣藏を惣掛合で出した。判官を淺野内匠頭、勘平を菅野三平、由良之助を大石内藏之助、師直を吉良上野之介、九太夫を大野軍右衛門、木藏を梶川與三兵衛、郷右衛門を原惣右衛門、平右衛門を寺坂吉右衛門と實録ぶつたまではわかつてゐるが、おかる、おいし、となせ、顔世、小浪、定九郎、伴内、など、穿鑿の路に迷つたらしいのは愛嬌である。

而してその年六月、松嶋文樂座での『鎌倉三代記』には、鎌倉の二字を故意に削つて、角書き付きの仰々しい名題が巾を利かすことになつた。こんな容子に、

大元帥は眞田左衛門尉奇術の軍配

名將は徳川老

君智仁の陣取

三代記

簇大將は後藤又兵衛英勇の鋒先